



アジアの高等教育事情 ダイナミック・アジア 8

チュラーロンコン大学

高等教育のマス化とASEAN 統合に向けた国際的地位の向上を目指して タイの高等教育戦略

鈴木康郎 大阪成蹊短期大学児童教育学科准教授

カンピラパーブ・スネート 名古屋大学大学院国際開発研究科講師

高等教育の歴史的展開

東南アジアにおいて長い歴史を有するタイの高等教育は、1917年に設置された最高学府チュラーロンコン大学にまで遡ることができる。その後、タマサート大学が1934年に設置され、以降、1960年代まで国立大学を中心に、バンコク以外の地方各地にも設置されていく。多くの国立大学には、地名のみならず歴代国王の名前も掲げられ、卒業証書は国王をはじめとする王族により直々に授与されるなど、まさに国家のエリートのためのものであった。

しかしながら、1970年代以降はオープン大学が設置され、高等教育人口が急速に増加していく。オープン大学とは、高卒またはそれに準ずる者が、無試験で、一般の大学と比較し非常に安価な授業料で入学することが可能な大学である。また、通信制教育や自学自習による授業の履修が可能であり、そのため大学が近隣に設置されていない地方の学生や社会人などに高等教育の機会を提供することが可能となっている。

1990年代には、各地に設置されていた教員養成カレッジ

がラチャパット地域総合大学へと昇格した。さらに全国に39校あったラチャモンコン工科大学が2005年に9校に統合され、ラチャモンコン工科大学へと昇格した。こうして高等教育機関数・在籍者数は拡大を続け、マス化段階を迎えるに至った。一方、1990年代後半には大きな経済危機を迎え、国際競争力の強化など教育の質の面にも目が向けられるようになった。

マス化を迎えたタイの高等教育とそれを支えるオープン大学

タイにおける高等教育学齢人口(18~21歳)は、2008年現在、約418万700人である。学士、準学士、オープン大学の全てを含んだ高等教育在籍者は約220万2,400人であり、在籍率は実に52.7%に達している。うち、オープン大学の在籍者は約47万9,700人であり、オープン大学を除いた場合の在籍率は41.2%にまで下がる。このデータからも、無試験で入学でき、社会人や地方の学生に広く開かれたオープン大学のニーズがいかに高いかをうかがうことができる。また、高等教育機関数について見ると、その内訳は国立高等教育機関78校(オープン大学2校、ラチャパット地域総合大

学40校、ラチャモンコン工科大学9校を含む)、私立大学69校、コミュニティ・カレッジ19校、計166校となっている(2009年9月現在)。私立大学の中には、盤谷日本人商工会議所をはじめ日本の産業界より全面的な協力を得て2006年に設置認可された泰日工業大学も含まれている。

なお、1999年国家教育法を契機に国立大学の自治大学(いわゆる独立法人)化が進められており、設置当初より自治大学として設置されていた3校に加え、10校が自治大学となっている。自治大学化は、学問研究の自由が保障され、柔軟な大学運営が可能となるとの評価を受ける一方、競争原理が導入され、経済至上主義に陥る可能性を指摘する声も少なくない。

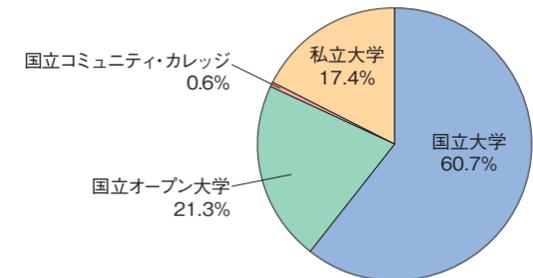
高等教育のマス化を支えるオープン大学として、ラムカムヘン大学とスコータイ・タマティラート大学の2校が設置されている。ラムカムヘン大学は最初のオープン大学として、1971年に法律、経済、人文、教育の4学部が設置された。入学資格は、高卒または中等学校卒で5年以上の公務員勤務経験がある者となっている。新入生が履修上限まで履修した場合の入学料と授業料等の合計(1学期分)はわずか1,860バーツ(約5000円)である。このように無試験で授業料も安価な同大学は、様々な年齢や階層の高等教育需要の受け皿となっている。現在では10学部にまで増加し、学士、修士、博士、インターナショナル・プログラムといった多彩な課程が整備されている。メインキャンパスはバンコク郊外にあるが、22県に地方キャンパス、47県に学術サービスセンターが設置され、地方にいながら学習することが可能となっている。

スコータイ・タマティラート大学は、増加し続ける学生数に対応しきれないラムカムヘン大学を補うべく、東南アジアで最初の通信制教育による大学として1978年に認可された。同大学は2年間の準備期間を経て、1980年に教育、人文、経営科学の3専攻で一期生が受け入れられた。その後、1993年に修士課程が、2006年からは博士課程が開講され、現在では12の専攻が設けられている。なお、入学資格は、高卒または中等学校卒で5年以上の職務経験があり、かつ25歳以上の者となっている。

地域に根ざしたコミュニティ・カレッジの復興

アメリカの影響を受け、最初のコミュニティ・カレッジとし

図1 タイにおける高等教育在籍者数の機関別内訳
(2008年現在) (n=2,422,726人)



※なお、ここでの高等教育在籍者数は大学院、ディプロマ等を含むため、本文の高等教育在籍者数とは一致していない。

て1977年にブーケットコミュニティ・カレッジが設置された。以降、各地にコミュニティ・カレッジが設置されたが、同制度は1996年に1度廃止されている。

しかしながら、高等教育機関が設置されていない地方の各県に、12年間無償教育を受け卒業した者に準学士を授与する教育機関の必要性が認識されるようになり、2002年に10校のコミュニティ・カレッジの設置が認可された。いずれも既存の職業教育カレッジとノンフォーマル教育機関を拡充してコミュニティ・カレッジに昇格させたものである。その後、2004年に7校、2006年に1校、2007年に1校が設置され、現在では計19校となっている。

コミュニティ・カレッジでは、入学希望者は無試験で入学することができ、他の高等教育機関よりも授業料が安価で、カリキュラムも地域の職業ニーズに合致したものであることが利点としてあげられており、地域に根ざした高等教育の発展に果たす役割が期待されている。

図1は高等教育在籍者数の機関別内訳を示したものであるが、オープン大学とコミュニティ・カレッジの在籍者は合わせて21.9%に上る。また、設置者別に見た場合、国立が82.6%であるのに対し、私立は17.4%にすぎない。

高等教育の国際化へ向けて

他のアジア諸国と同様、マス化とともに課題となっているのが、高等教育の国際化である。タイでは、「第1次長期高等教育計画」(1990年~2004年)を契機に、本格的な高等教育の国際化政策が打ち出されることとなった。そこでは、国際化に関連する提言として、①言語・経営・コンピュータなど、国際社会で活躍できるような資質を獲得させること、②

学士・大学院レベルにおいてインターナショナル・プログラムを導入・推進すること、③一部専門分野において海外の高等教育機関と同等のカリキュラムを開設すること、が打ち出された。さらに、同計画においては高等教育開発の重要な理念として、①平等性、②効率性、③卓越性、④国際化、⑤民営化が打ち出された。同計画はタイにおけるグローバル化対応の高等教育改革の出発点ということが出来る。また、同計画後に策定された「第7次高等教育開発計画」(1992年～1996年)においては、アジア人留学生の積極的受け入れ、奨学金や研修プログラムを通じた近隣アジア諸国への教育援助体制の構築が具体的な目標として示された。

こうした指針を背景に、次に述べるような各種国際化政策が打ち出されていくこととなる。

インターナショナル・プログラムの普及

インターナショナル・プログラム(International Program: IP)とは、タイ国内の高等教育機関において、教授用語を外国語(ほとんどが英語)とするカリキュラムを実施するコースである。また、IPでは教育水準が国際的であること、諸外国との学術交流を積極的に行うことが指針として示されている。IPは、タイ人と外国人留学生のいずれもが対象となっており、タイ人留学生のニーズを国内でまかなうと同時に、外国人留学生受け入れの基幹コースとしての役割も果たしている。2008年現在、全884プログラムが開講されており、課程別の内訳は、学士課程296、修士課程350、博士課程215、その他23となっている。また、設置者別の内訳は、国立高等教育機関33校で629、私立大学24校で255となっている。

IPは欧米各国の大学とのツィニングやダブルディグリー・プログラムとして提供されることも少なくない。こうした事例として典型的なのが、アーヘン工科大学(RWTH Aachen University, 独)との共同施設としてキングモンクット工科大学北バンコク校に設置されたSirindhorn International Thai German Graduate School of Engineering (TGGS)である。

このように、IPは英語による高等教育を希望するタイ人学生の受け入れ、外国人留学生の受け入れ、および海外高等教育機関との学術連携といった側面でタイの高等教育の国際化を支える重要な施策である。実際にIPの人気は

高く、その開講数は1993年にはわずか27にすぎなかったが、2005年に520、2006年に727、2007年に844、2008年に884というように着実に増加をしており、もはや地方の大学でも珍しくない存在となっている。

近隣諸国からの留学生受け入れの開始

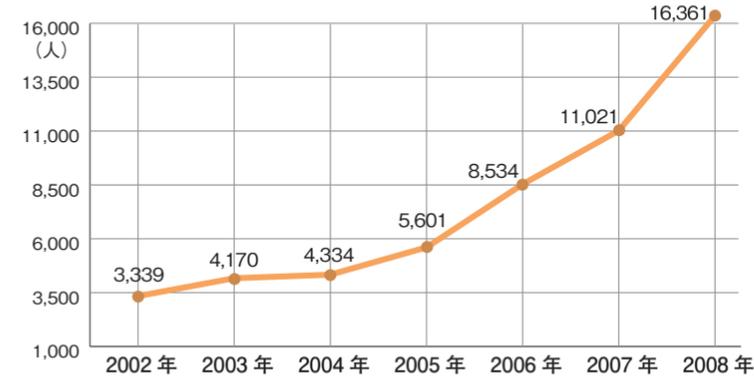
いうまでもなく、これまでのタイは、日本や欧米各国に留学生を送り出す立場にあった。2007年現在、タイから海外への留学生送り出し数は、約2万4,500人であり、その主な留学先国は、アメリカ(約9,100人)、オーストラリア(約4,900人)、英国(約4,500人)、日本(約1,700人)となっている(ユネスコ統計)。

一方、先に述べた「第7次高等教育開発計画」以降、外国人留学生、とりわけアジアからの外国人留学生の受け入れがタイの高等教育にとって新たな課題となっている。2002年より、タイ政府は外国人留学生受け入れに関する統計を取り始めたが、その推移は図2のようになっており、2002年から2008年までの間に4.9倍の伸びを示している。

2008年現在、外国人留学生受け入れ総数は16,361人の上っているが、これを国別に見ると、中国7,301人、ラオス1301人、ミャンマー999人、カンボジア984人、ベトナム895人となっており、中国とCLMV諸国(カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム)からの受け入れが大多数を占めている。また、人気のある専攻分野は順に、タイ語、経営、英語、国際ビジネスとなっており、タイ語を除くと国際的に広く通用する専攻分野を学んでいる学生が多い。

受け入れ先としては、アサンプション大学2,558名、チュラーロンコン大学1,329名、マヒドン大学1,069名、ブラパー大学591名となっている。外国人留学生受け入れで圧倒的多数を誇るアサンプション大学は、1969年にキリスト教系のアサンプション商科カレッジとして設置され、1991年より総合大学となったタイで最大規模の私立大学である。現在は、バンコクとその郊外に3つのキャンパスを設けているが、日本を含めた世界各国と学術交流協定を結んでおり、オーストラリア、ドイツ、英国といった国々の高等教育機関とのダブルディグリー制度も設けられている。タイで最も古く今なお最高学府でもあるチュラーロンコン大学は、2008年に法人化され、総学生数は36,309人(うち学士課程在籍者21,

図2 タイにおける外国人留学生受け入れ数の推移



776人)に達している(2009年現在)。IPは85(うち学士13)、海外の大学・企業との学術交流協定はのべ501件に上っており、ハーバード大学、オックスフォード大学、マサチューセッツ工科大学といった世界有数の大学と提携を結んでいる他、日本の旧帝国大学の7大学とも提携を結んでいる。

ASEANの教育ハブの実現に向けて

現在、タイでは国家戦略としてシンガポールやマレーシアと競い、東南アジアの教育ハブの実現を目指している。そこでは、教育の質を国際的な水準にまで引き上げ、それを通して国外からの人材を誘致し国家の経済発展に資することが目的とされている。

これについて、「第2次15カ年長期高等教育計画フレームワーク」(2008年～2022年)において、グローバル化がもたらす高等教育の将来について2つの側面からシナリオが描かれている。1つは、国境を越えた高等教育の市場化の進展であり、もう1つは2015年のASEAN統合に伴う人的交流の活性化である。前者によって各国の高等教育は同じ市場のもとでシェアを奪いあう状況が予測され、後者によって学術交流や単位互換制度が整備され、高等教育市場における人の移動が容易となる状況が予測されている。いずれにしても、域内のより教育水準の高い国へと留学生が流動することが示唆されており、高等教育の国際的な水準を高めることが急務であり、タイの高等教育の国際的地位を高める好機であるとされている。

2010年～2012年には、中等教育及び職業教育、高等教育分野において教育ハブ構想を進めるために、32億3000万バーツ(約87億円)の予算が組まれ、以下の5つの具体的目

標が掲げられている。①外国人児童生徒、学生および研究生数を増加させる、②14の中等学校を、国際水準の教育を英語で提供し、卓越した学習リソースセンターとして近隣諸国からの生徒を誘致する国際実験校とする、③6つの技術系カレッジおよび職業教育カレッジを国際職業教育センターとする、④既に設置されている495のインターナショナル・スクールについて教育の質の向上をはかる、⑤100人以上の外国人留学生を受け入れている国立・私立高等教育機関につい

て教育の質の向上をはかる。

こうした状況の中、2009年10月にASEANの中核学習センターを目指し、9つの国立大学(タマサート、チュラーロンコン、カセサート、コンケン、チェンマイ、マヒドン、キングモンクット工科大学トンプリ、スラナリー工科大学、プリンス・オブ・ソンクラ)が拠点大学(National Research University)として選定され、2009年～2011年まで重点予算配分を受けることとなった。拠点大学構想の目標には、世界大学ランキングにランク入りすること、ASEANの教育ハブとしての水準を満たすこと、産業界との連携により研究成果を経済発展に直接結びつけること、国家の競争力の向上に具体的に貢献すること、などが示されている。

実際に大学ランキングは、近年、大学の教育研究の質を示す重要な指標として用いられるようになってきている。2004年よりThe Times Higher Education Supplement (THES)により毎年発表されている世界大学ランキング(QS World University Rankings)の2009年では、チュラーロンコン大学が唯一トップ200に入っている(138位、2008年は166位)。また、同THESによる2010年アジア大学ランキング(QS Asian University Rankings)では、トップ200に7校がランク入りしている(マヒドン28位、チュラーロンコン44位、チェンマイ79位、タマサート91位、プリンス・オブ・ソンクラ101位、コンケン122位、カセサート126位)。

加えて、外国人留学生の受け入れについては、2008年より10年間にわたり毎年10%の受け入れ数増加を目指している。さらに挑戦的な目標として、2015年のASEAN統合を迎える時点で10万人を受け入れる構想も掲げられている。タイは本格的に留学生送り出し国から受け入れ国への転換をはかろうとしているといえる。 ■